

はじめに

提出作品《大雨》は、ステンドグラスと鋳物という技法を用い、大学美術館3階テラスの空間に、雨の情景を創造したものである。

人生がそうであるように、作品制作は、思わぬものとの出会いによって予想もしなかった展開をみせる。本論文及び作品制作も、絵画を専門とし「油絵を極める」という意識のベクトルが、予期せず出会った鋳造という世界によって全く異なる方向へ向いたこに起因している。

力強い素材性や、炎を用いた制作工程を持つ鋳造の世界は、私の感覚の根本へただならぬ影響を与えた。鋳造素材の物質的な魅力や五感を働かせる制作工程など、鋳造制作を知れば知る程、まるで化学反応のように私の絵画表現を変容させていった。油絵具を、色や形を表す手段として抽象的に用いた表現は、物質的なものとして絵具の色を意識した表現となり、さらには石灰、石、ガラスという壁画素材の物質そのものを直接的に用いる表現へと変化して、最終的に、ガラスと金属によるステンドグラスの表現へ自然と辿り着くこととなった。

鋳物制作を契機とした絵画表現の変容はステンドグラスと鋳物の組み合わせという形で結実したが、この組み合わせは、それぞれの媒体独自の魅力を相互に引き出すものとして実感された。そして2つの要素が持つ相違点は、個々の魅力を調和させる表現の探求へと展開していった。非常に個性の強い2つの要素の調和は、容易なことではなかった。しかし私は、両者を結合する動機を「光」に求めることで、2つの表現が自然光や空間環境に働きかけ、1つの空間創造に結びつく可能性を見出した。

本論文は、鋳物に出会うことで変化して来た私の意識を、これまでの制作の軌跡を通して巡ると同時に、壁画と空間の関係、ステンドグラス、鋳物について歴史的考察を行い、ステンドグラスと鋳物による空間創造の可能性を探るものである。本論文は次のように構成されている。

第1章「ステンドグラスと鋳物」では、壁画と空間の関わりについて、歴史的作例を観察しつつ自己の体験からの考察を加え「壁画が空間を創造する」事実を導く。さらに、私の表現技法であるステンドグラスと鋳物について、それぞれの歴史的作例を挙げ、個々の技法素材が空間環境とどのように関わって表現されてきたのかを調べる。そして、これらの2つの要素が私にとって、空間を創造しうる表現素材である根拠を示す。

スクロヴェーニ礼拝堂のフレスコ画は、建物自体の意味と結びつき、建築すべての壁体を画像で埋めることで空間を意味づけていた。私はここで、ギャラリーなどに展示され、特定の環境と直接的な関係を持たない「タブロー」と「壁画」を比較し、壁画と建築空間の密接な関係を記す。また、幼少期に部屋の壁へ絵を描いた体験や、舞台上で身体表現を行った経験を挙げ、歴史的な壁画と自身の体験に共通する、空間創造への意識を明確にする。

西欧教会の初期ステンドグラスに見られる鉛棧の表現は、自然光を媒体とする「ガラスと金属」の共鳴によって、その技法素材の魅力を発揮している。一方、日本のステンドグラスを代表する小川三知の作例には、ガラスと鉛棧の特性を生かしながらも、西欧教会のステンドグラスには見られない「風景との調和」という意識が見られた。この日本的なステンドグラスへの視点は、私の制作意識と共通している。

鋳物では、まず、古代日本で生み出されていた青銅器に注目する。かつて神秘の光を作り出してきた鋳物を観察し、私が鋳物の「輝き」に魅了される根源的な理由を探る。また、時と共に風景に馴染みゆく鋳物として津田信夫の作例を挙げ、永久に朽ちない素材性よりも、鋳物の「移ろい」に趣きをみる日本的な視点と、私の鋳物に対する視点を重ね合わせる。

第2章「制作の軌跡」では、タブロー表現を行っていた私が「鑄造」の制作を体験したことをきっかけに、制作意識や表現方法が変容し「スタンドグラスと鑄物による空間の創造」という表現形態へと辿り着くまでの軌跡を追う。

鑄造の工程には、視覚のみならず五感の全てに訴えかけるものがあり、その経験は私に、支持体や絵具といった絵画材料の素材が、そのまま造形性に転化する表現への探究心を生んだ。こうして生じた鑄造への興味と絵画表現に対する意識変化は、「絵画と鑄物」を組み合わせた表現の追究をスタートさせた。鑄物と対応する絵画表現は、タブローから壁画へ、壁画からスタンドグラスへと徐々に移行していったのだ。

スタンドグラスとの出会いは、光との出会いでもあった。「ガラスと金属」という異質ともいえる素材同士を結んでいたのは「光」であった。例えば、照明器具において人工照明は「スタンドグラスと鑄物」という2つの要素を共鳴させている。多様な種類の「光」を媒体としてスタンドグラスの制作を進める内に、私が求める光は「移ろいを持つ自然光」であることを意識し、修了制作ではスタンドグラスと鑄物の「自然光による一体化」を目指すことになった。

第3章「大雨」では、これまでの問題意識に対する集大成として制作した博士展提出作品《大雨》において、スタンドグラスと鑄物の2つの要素がどのように共鳴し、いかなる空間を生み出したかを記す。

修了制作で目指したスタンドグラスと鑄物を「一体化」させるという修了制作の目的は、実際の制作を通して個々の表現世界を再認識した結果、2つの要素を単なる一体化ではなく相互に「共鳴」させようという新たな意識へと変化することになった。博士審査展提出作品の場は、こうした共鳴の前提条件となる「自然光」に溢れた場所を求めて大学美術館3階テラスとなった。時間の経過、透過する風景と作品の調和など、この空間の特徴から導き出された表現によって、スタンドグラスと鑄物の素材は互いに共鳴し、ここに「大雨」の新たなる空間が実現されることとなったのである。